

経済再生の教え

長期繁栄できる企業のあり方

②

コモンズ投資株式会社 / シブサワ・アンド・カンパニー 代表 渋沢 健



(写真提供：渋沢栄一財団)

会社にとって利益が伸びているということは、成長していることと同義であり、サステイナビリティを考へるうえで必要なことです。この点について、異論を差しはさむ余地はないでしょう。

サステイナビリティとは「持続可能性」を意味します。会社が経営を持続させていくためには、利益が伸び、成長していく必要があります。

しかし、この一年間に起こった経済混乱について思いをめぐらせると、はたして、利益や成長を重視する経営だけで、その会社は経営を持続できるのか、という問いにぶつかります。目先の利益が伸びてさえいけば、足元の成長さえしていれば、会社は長期的にサス

ティナブルであり得るのか。その問いに対する答えは、おそらく「ノー」でしょう。

後世にツケを残さない！利益成長のあとにくるのは…

こういう時代だからこそ、いま、あらためて会社にとっての利益を考へるべき時期にきているような気がします。

たとえば、一般的な投資家の立場で考へてみましょう。個人投資家も機関投資家も、投資する以上、会社に成長してもらわなければ困ってしまいます。会社が利益を伸ばして成長してくれるからこそ、マーケットで株価が高く評価

されます。株価は上がり、それに投資している投資家も、その恩恵に浴することができのです。

投資する場合、投資家は常にどの会社が今後、高い成長を続けるのかということを考へています。

そして、より高い成長が期待できる会社の株式に投資します。投資にとつて、入口戦略は重要です。しかし、同時に出口戦略についても常に配慮しています。つまり、どの会社に投資するのかという点も大事なのですが、自分がその会社に投資している間、その会社には成長しつづけてもらうことが必要になってきます。そして、その成長のピークでイグジットできるのが、投資家が最大の利益を得るうえで理想的であると考へることが一般的です。どこで利益成長に乗るかだけでなく、どこで利益成長のピークを見極め、降りるかという出口戦略も、投資家にとつては重要な意味をもっているのです。

言いかえれば、投資家にとつては、自分がその会社の株式を保有している間だけ、成長しつづけて

くれればよいのです。極端な言い方をすれば、自分が降りてしまっただけでは、もうその会社がどうなるうとも、いっさい関係ないということにもなります。

その結果、投資家は投資先である会社に対して、自分たちが投資している期間中、とにかく利益を最大化させることを望みます。当然、会社の経営者も、株主の要望にできるだけ応えようとはしますから、多少の無理は承知のうえで、利益を少しでも伸ばすための方法を考へることになるのです。

それがどのような影響を及ぼすのか。昨年9月、米国の大手投資銀行であるリーマンブラザーズが破たんしました。彼らは、利益を優先に必死にビジネスを展開させました。株主からすれば、自分たちの要望にこたえてくれる優秀な投資対象だったことでしょう。しかし、リーマンブラザーズの損益計算書に載っている利益の数字がほとんどふくらんでいく一方で、リーマンブラザーズは、劇薬にもなる「レバレッジ」という禁断の実に、手を出しすぎていたのです。

1 渋沢栄一の教え

「単に自己の利益のみを主とし、利益を得んがために、商売をなすというならば、すなわち報酬を得たいために、職務を執るといふに同じく、つまり報酬さえ得れば、職務はどうでもよいことになる」

2 渋沢栄一の教え

「なぜ、あなたは働くのですか？」という問いに対して「給料をもらうため」と答える人も少なくないでしょう。しかし、それは「報酬」という主人に使われてる奴隷のようなものです。働く以上、自分の仕事に誇りや責任をもつ必要があります。

3 渋沢栄一の教え

「他人を押し倒してひとり利益を獲得するのと、他人をも利して、ともにその利益を獲得するのと、いずれを優れりとするや」

4 渋沢栄一の教え

「自分一人だけが利益を得られればよい。むしろ利益は独り占めしたい。」

後日談は、読者の多くがすでにご存じでしょう。リーマンブラザーズは破たんに追い込まれました。「もっと利益を」「もっと成長を」という投資家の望みを叶えるためにとつた行動が、結局、同社の破たんにつながったのです。また、そればかりでなく、同社の破たんによって、世界中の金融マーケットは、大混乱に陥りました。

そう考へると、利益を伸ばすこと、成長を持続させることが、決してその会社にとつてサステイナブルではないということが、理解できるのではないのでしょうか。

それは、一國の経済成長にもあてはまります。国が見せかけだけの経済成長を持続させるのは簡単です。国債をどんどん発行し、公共事業などに投資していけばよいのです。そうすれば、経済の規模は確実に拡大していきます。

しかし、その一方で、国の借金とはほとんど積み上がっていきま

のツケを支払わされるなかで、現代の人たちに対してどのような思いをもつでしょうか。「本当に昔の人たちはよいことをしてくれた」などとほけつて思わないで

利益の成長は確かに大事なことでありますが、それをいまの時点で享受している人たちは、常に利益成長のあとにくるものは何なのかということにも、常に気を配る必要があるのです。

日本資本主義の父と呼ばれ、生涯に約五〇〇もの企業の設立に関わった渋沢栄一は、みずからの経験をもとに「利益」について非常に示唆に富んだ言葉を遺しています。人間は誰しも忘れる生き物ですから、世界中を金融危機に追い込んだ今回の一連の出来事についても、いつか忘れ去り、再び同じことを繰り返すのかもしれない。しかし、この危機から立ち直るうえで、いまから一〇〇年以上も前に渋沢が遺した言葉に、一度、耳を傾けてみる意味はありそうです。現状と照らしつつ、いくつかご紹介していきます。



しぶさわ けん

1961年生まれ。(財)日本国際交流センター、ファースト・ボストン証券会社(NY)、JPモルガン銀行(東京)、JPモルガン証券(東京)、ゴールドマン・サックス証券(東京)、ヘッジファンド大手のムーア・キャピタル・マネジメント(NY)を経て、2001年春、シブサワ・アンド・カンパニー(株)を設立。07年11月、コモンズ投信(株)を設立、現在に至る。経済同友会幹事、渋沢栄一記念財団理事、日本医療政策機構理事、健康医療評価研究機構理事、学校法人文京学園評議員などを兼任。

<http://hcwrc.commons30.jp>

経済再生の教え²

「日本資本主義の父」渋沢栄一に学ぶ



3 渋沢栄一の教え

「個人を利すると共に、国家社会も利する
事業なるや否やを知ること……」

これは、ビジネスを立ち上げる際に必ず心にとめてもらいたい言葉のひとつです。

税金を多くとり、利益の再配分を行っていますが、これは、根本的なところで成功者を信用していいないと考えることもできません。

会社を設立した人、設立に協力してくれた人が先行者利益を得るのは当然ですが、同時に、そのビジネスが社会全体にとってメリットがあり、社会貢献できるものであることが大事です。言うなれば、企業の社会責任(CSR)を示唆しているといえるでしょう。

日本では、利益を上げた人から大事なこととは、成功者が自分の得た利益を、みずから積極的に社会に還元していく姿勢をもつことです。そうすれば、成功者がねたみから足をすくわれるようなことがなくなり、本意の意味で、成功することが社会全体から歓迎される世の中になるのだと思います。

4 栄一の教え

「真正の利殖は仁義道德にもとづかなければ、決して永続するものではない」

私はいかに読む

富を築こうというときには、利益を追求することも大事ですが、それとともに正しい道を進まなければ、たとえ富を手にしたとしても、永続さ

ずかなく、国家社会も利する事業なるや否やを知ること……」

せることができませぬ。自分だけの懐を温めるのではなく、社会全体に利益がもたらされるようにする。それが結局、自分の幸福につながるのです。